

大学図書館問題研究会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生气付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

あけまして おめでとう ございます。

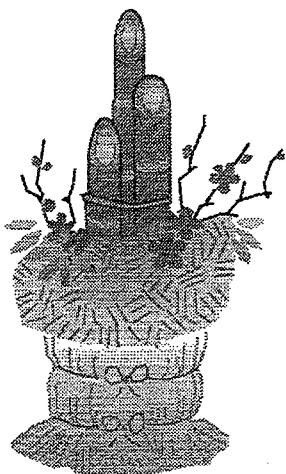
これからの京都支部の活動について

支部長 篠原俊夫

1998年も多難な年であることは予測できるが、そんななかでも大学図書館が直面している課題に正面から取り組んで、問題解決の糸口を見出していくこと、これを京都支部の活動の課題としたい。例えば、昨年、ミニ研究集会のかたちで取り組んだ職員問題をさらに深めることも課題のひとつだと思う。アウトソーシング（業務委託）、専門職制度のあり方、非常勤職員と図書館業務のあり方、等々について概括的な問題提起をしたにとどまっているので、これらを個別のテーマとして取り上げてゆくことも可能ではなかろうか。

京都支部が毎年開催している京都研究集会は、今年は討論集会の形式とする方向で検討中であるが、あらかじめ設定するテーマにこれらの課題を含めて検討することも一の方法だと思う。いずれにしても、大学図書館の現場がいま抱えている問題を検討課題として深く掘り下げてゆくということにつくる。会員諸兄の一層の奮闘とご協力をお願いします。

**本年も大学図書館問題研究会京都支部の活動を活性化に向けて
ご協力よろしくお願い申し上げます。**



	新年のあいさつ
目	これからの京都支部の活動について……
	支部長の年の辞…………… 1頁
次	「館種をこえた図書館間連帯をめざして」 に参加して…………… 2頁
	新連載「リュウ」第2回…………… 3頁
	数珠つなぎ(23)…………… 4頁

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または
編集気付（京都橘女子大学
☎ 075-574-4118 FAX 075-574-4124
♥ kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp）田北まで

第6回京都図書館大会

「館種をこえた図書館間連携をめざして」に参加して

吞海沙織

第6回京都図書館大会は、1997年12月5日午前11時より、京都大学附属図書館AVホールで開催された。大会のメニューは以下の通りである。

- | | | | |
|-----|-------------------------|-------------------|--------|
| 講演 | 「国立国会図書館関西館について」 | 国立国会図書館主任参事 | 内海啓也氏 |
| 講演 | 「私の図書館研究と資料収集」 | 京都大学教育学部助教授 | 川崎良孝氏 |
| 報告1 | 「京都大学附属図書館の電子図書館サービス」 | 京都大学附属図書館電子情報掛長 | 小川晋平氏 |
| 報告2 | 「大阪府立中央図書館の相互協力」 | 大阪府立中央図書館ネットワーク係長 | 三宅多賀志氏 |
| 報告3 | 「嵯峨野高校こすもす科『京都文化論』について」 | 嵯峨野高等学校教諭 | 古谷一樹氏 |

京都では、「館種を超えた図書館間の連携」の歴史が古い。図書館法制定3年前の1947年から25年間、館種を超えて研究や交流活動を活発に行う「京都図書館協会」が存在した。残念ながら、その後休止になったままになっているが、1976年に京都府立図書館に事務局を置く「京都府図書館等連絡協議会」が発足された。この「京図連協」と「日本図書館協会」等が主催し、事実上第1回京都図書館大会となった「日本図書館協会創立百周年記念京都図書館大会“フォーラム・くらしと図書館”」が1992年に開催されてから、毎年開催され、京都図書館大会は今回で6回目を数える。

どの講演・報告も大変興味深く、時間が短く感じられた。とくに、川崎助教授の「私の図書館研究と資料収集」では、研究者がひとつの論文をまとめあげるまでの過程を垣間見るような気がして、とても面白かった。「利用者は、基本的にとっても恥ずかしがりだと思います。」というひとつのこと、心に残った。カウンターに寄せられるニーズは、利用者のニーズのほんの一部分でしかないということを改めて認識させられた。また、古谷教諭の「嵯峨野高校こすもす科『京都文化論』について」では、次世代へ文化や情報探索方法を伝授するという教諭の熱い気持ちが伝わってきた。京都の文化を学ぶという目的のもとで、生きた情報探索法が授業の上で実践されているようだ。卒業生は、きっと将来図書館のよい利用者になってくれるだろう。

5時までは「昼の部」とすると、大会終了後の懇親会は「夜の部」である。「昼の部」は、「館種をこえるために他館種を知る時間」であり、「夜の部」は、「館種をこえるきっかけをつくる時間」だと思う。だから私に関しては、「夜の部」に参加してはじめて「大会に参加した」といえる。私は時間の許す限り、「夜の部」に参加することにしている。「夜の部」に参加したからといって、いつも新しい人間関係が生まれるわけでも、いつも人間関係が深まるわけでもない。でも、同じ図書館に携るものとして、同じ場を共有することに深い意味と喜びを感じてしまう。もしかして、50年前に発足された京都図書館協会の種は、「夜の部」で生れたのかもしれないと、勝手に想像している。

(どんかい・さおり 京都大学電気電子工学図書室)



リュウ

作 西田 治

「ねえ、さっき話したダイヤのペンダントトップ買って！買ってくれるんだったら行ってもいいわよ」と圭子は僕の顔を覗くように見て言った。

「楽しみに行くのに、なんでそんなの買わなきゃならないんだ」

「あんな所へ行くんだから……」

「偏見！偏見だよ」

「チャンスさえあれば、他の女の人と行きたいって思ってるんでしょ」

僕は妙な気分させられた。圭子と行きたいと思っただけなのにとすると、圭子の言動に腹が立ってきた。リュウがクシャミをした。

「そんなことないよ」と少し力が入った返事をした。怒りを持ったせいだと自分でもわかった。ところが圭子は

「男なんてわかったもんじゃないわ。他の人と行こうとすれば、あのダイヤ買う位のお金かかるんでしょ？」

「知らないよ！」

自分でも言葉に少し怒気が入り込んでくるのを感じた。なんでも一般化してしまうあの悪しきことば「男なんて」「女なんて」という考え方が僕には我慢ができなかったのだ。

「買ってくれたら一緒に行ってあげてもいいわよ」と圭子がたたみかけてきた。僕は沈黙した。リュウは、僕らに背を向けていた。夫婦がホテルで楽しい時間を過ごそうというのに、なぜダイヤを買わなければならないんだと思うと納得ができなかった。ダイヤの代わりにホテルへ行くという考えが不純だと思った。

「ねえ、買ってくれるの、くれないの？」

「今、考えてるんだ」

「考えることなど何も無いじゃない。お金があるかどうかだけじゃない」と圭子は不思議そうに言う。お金があるかどうかと言えば、ポケットの財布にそれくらいは入るなと思った。しかし、僕はお金の有無じゃなく、愛情の問題だと思った。これだけ気持ちがすれ違っていたら、ホテルへ行っても不愉快になるだけだと思うと気持ちも萎んでしまった。僕は返事をする気持ちまで萎えてしまった。

やがて、僕らは宝石店の前まで来た。ところが既に閉店していた。無慈悲なシャッターの前で圭子は悔しがった。僕は安心した。リュウは、ヘッヘッと笑った。

それから、僕らは沈黙し、それぞれの思いに沈んで帰宅した。独り圭子の足が重たそうだった。

僕がリュウを小屋に繋いでいる間も、圭子は黙っていた。玄関に入っていく圭子のしょんぼりとした後ろ姿に、僕の先ほどまでの怒りも萎えてしまった。可愛そうな気がした。リュウは、そんな僕らの気持ちなど意に介せず、盛んに水を飲んでいて。僕はといえば額の汗を拭いながら、ぼんやりとリュウの方を眺めていた。

戦慄の新コーナー!!

立命館大学総合情報センター情報管理課 とりい まき

大図研京都数珠つなぎ 第23回

鳥井眞木 さん

図書館生活15年

同じ職場の井上さんよりご氏名を受けました鳥井です。学内では大きな顔をしていますがおそらく大図研の会員のみなさんには長い間、お目にかかる機会がありませんでしたので、私のことをご存じでない方がほとんどでいらっしやることと思い、少し自己紹介をさせていただきますこととします。

歳がばれてしましますが、高校を卒業後、大学に入学するまで3年間、ブランクがあり、大学を1982年に卒業しました。その年の10月、立命館に色を求め、それ以来15年あまりの歳月、図書館にいます。大図研の会員歴も同じく15年になりますが、会費を払うだけの会員ではいけないと思いつつも、ひっそりと片隅におかせてもらっています。

私立大学の事務職ですので、職場の人事異動も定期におこなわれるばかりか、昨年は2回も大規模な異動がありました。そのたびに多くの方が図書館を出入りされます。今回でも春に図書館情報管理課へ転入し、秋に財務部管理課へ異動した方もありました。その方などは司書資格をとる決意をされて、某大学の通信教育の授業料を払い込んだ矢先の異動でした。「『管理課』違いやったんかなあ」なんて冗談で言ってますが…これに限らず人事政策の無策にはいい加減、頭にきてます。

ここ昨今、異動が多いのですが、私自身はなぜか図書館から外に出ることなく過ごしてきました。後がなかなか育たないので、出られないのかなとも思いますが、目録に7年、逐次刊行物に8年過ごし、収書に1年目です。ということで、その「図書館」という名称も、昨年秋になくなり「総合情報センター」と冠することとなりました。ただ、外部にわかりにくいので、従来の図書館で通していますが。

収書といいますが、図書館の専任職員の数が減るなかで、非専任職員の人数は増え、その仕事のマネジメントもしなければなりませんので、収書・受入・支払い係としての仕事をしています。ですので専任職員2名で8名の契約職員の方と仕事をし、周辺に委託業務として配置されている方々との調整業務が日常的に発生します。どうみても山積みされていく仕事を日々こなすのに追われる毎日です。本来、図書館員の専門性の追求、向上と関わり、業務のアウトソーシングが図られるべきはずだったのですが、なかなかそうならないのが現実のようです。図書館側から専門職の必然性を打ち出しても、それを説得する材料が十分に出不出されていないので、業務のアウトソーシングだけが進むという閉塞的な状況になっているような気がします。

そのような中で、昨年、私なりに一大決心をして、司書資格を取得しました。この仕事を始めたころは、新人は5年で配転対象という学内の原則もあり、今度こそは配転という気持ちでいました。次にここで結婚、出産、育児と仕事との目まぐるしい日々、そのなかで組合はじめ、保育所や学校、学童の役員などなど、10年あまりの間に二人の子どもの出産で休んだ以外、何もやらなかった年などないくらい超多忙な日々を過ごしてきました。もともとあまり器用でなく、手抜きができない性格も災いしたようです。組合の婦人部長を勤めた翌年、なんと何も当たらない年ができました。これが最後のチャンスかなとも思い、1年間、通信教育で勉強し、めでたく司書を取得したわけです。

本学では司書資格を取得した人が、すぐに配転してしまうのですが、今のところまだ図書館にいます。少なくとも図書館にいる限りは、大図研の会員でいますので、続きはまたの機会に譲ることにします。